

令和 8年 2月 4日 (水)
午前9時30分～11時30分
場所：会議室 記録：六車

1 開会

2 校長挨拶

まずは今年度も本当にいろいろな御助力、御支援、御理解いただきありがとうございました。おかげさまで今のところ、大きな事故等なく学校も進んでいる。子どもたちに関しても重大な事故等もなく教育活動ができています。地域の皆様や関係機関の皆さんに支えていただき、特にこの学校運営協議会においては、地域からの資源、福祉的な資源、この2つに御助力いただきながら学校運営を進め、整理もされてきた。バックボーンを持った皆様の力添えのおかげで、本校ではいじめの重大事故が本校では今のところ無い。それができているのは、職員が早めに目を配ったり、ちょっと兆しを感じたときに介入したり、よく話を聞いたり、解決に向けて話し合ったりしているためである。また、知的障害がある子どもの学校であるため、いろいろな個性を持っている子どもたちだが、その子どもたちが、個性ゆえに起きてしまったことであっても相手が嫌だと思うことについては、そこは対応しようという意識が醸成されてきている。まずは嫌だと感じた人を中心に「解決しよう」という運営がなされているおかげだと思っている。こういうことができるのは、職員の中でも「安心して取り組んでいける」という安心感があったからこそだと思っている。そういった意味でも、柱となる学校経営計画は大変大事なものだと思っている。

学校評議員から学校運営協議会に移って、今年度で満4年を終えようとしている。学校評議員の時には、学校経営についていろいろと御意見を伺いながらやっていた。学校運営協議会になってからは、「この学校経営計画でよいのか」、「こういう人事配置でよいのか」というようなところや、それに関して「じゃあ、うちはこうするから、そちらはこうしてみたら」というところまで対等な、ある意味一つの独立した組織として学校と渡り合っていただけの組織になった。非常に私たちも心強く思っている。

今日の会議の中で、今年度の学校自己評価や経営の反省、来年度の方向性についての話をするが、それは単に学校の評価をいただくという水準のものではなく、積極的に学校運営協議会の委員の立場として意見をいただく。そして経営について、「学校がこうするのなら、私たちはこうできるよ」というところも意見をいただくとありがたいと思っている。

今日の内容は、今年度のまとめと来年度の方向性の2つがあるが、今お伝えした学校運営協議会の立場から御意見をいただきたい。繰り返し話していることだが、学校運営協議会ができたことで、「学校にもWin、委員の皆さんにもWinが理想」として始まっている。自治会長の山本様がいろいろな学校の学校運営協議会に御参加で、なかなか大変なところはあると思うが、負担に報いるような「地域にもWin、学校にもWin」という学校運営協議会としたい。

私が袋井の小学校に勤務していた時に、その学校の運営協議会がどうだったかという、運営協議会の委員の方が声をかけて、大勢いる外国にルーツがある子どもに放課後の日本語指導や夏休みの宿題を見る活動をやってくださっていた。シニアの方が多かったが、学校としては非常に助かっていた。学校の資源だけではやりきれない日本語指導をやってもらえた。一方、地域の方々がどう言っていたかという、ゴミ出しのことやアパートの家賃のことなど、非常に外国籍の方と衝突する場面が多かったとのこと。ところが「その家の子を見たことがあると

ということから、コミュニケーションの入り口になったり、お子さんが「あのじいじとばあばの世話になったよ」と言ってくれることで、自治会で声をかけやすくなったりして、結局は子どもたちのためにやってくださっていたことが地域にもWinになるということであった。また、袋井市が学力低下で、小学校で算数検定や漢字検定をやるように言われた時期があった。外部の営利企業が実施する検定なので、学校の教員が携わることができなかった。そこで、学校運営協議会の委員の皆さんがPTAを中心に地域学校共同本部に声をかけてくれ、算数検定や漢字検定の運営をやってくれた。教員は職員室で控えていて、困った時だけ少し支援するような感じでできたため、学校は大変助かった。後々聞くと、「自分の子どものことだから手伝わなければ」とPTAの方々や地域の方々が言ってくれていた。

今紹介したのはある一部の小学校の例だが、私たちが目指している学校運営協議会は、1つ目は、沼津特別支援学校がこの地域にとって、皆さんにとって役に立つ存在になるということ。2つ目は、それによって子どもたちの教育活動が充実すること。この2点が非常に大事だと思っている。今年度の最後の回に、この意義、地域における意味、学校における意味を改めて確認させていただき、校長の挨拶に代えさせていただく。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

3 協議等

(1) 令和7年度学校自己評価について

(副校長) 「学校自己評価」は、本校の職員が自分たちでこの1年の学校経営がどうだったかを評価している。アルファベットでA、B、C、Dと評価基準があり、Aが一番良い評価、Dが一番悪い評価となっている。評価項目が多くあるため、一つひとつを説明すると時間がかかるため、おおよその評価を説明させていただく。

学校経営は「安全」「専門」「連携」「チーム」という大きな4つのくくりで経営している。そのうちの1つ目、「安全」に関しては人権、子どもたちの安全（防災や防犯）というような評価項目になっている。おおむね評価はAだが、Bの評価がいくつかあるため、それについて触れさせていただく。「職員が人権育成年間指導計画を着実に遂行しているか」の評価はBとなっている。人権を守るという観点では、学校は人権を守らなければいけない立場にあるが、Bである。毎月、人権の重点項目を職員で共有しながら、「今月はこんなことに気をつけてやっていきましょう」と取り組んでいる。しかし、「周知の方法をもう少し広く分かりやすく伝えられるとよい」という評価もあり、評価はBとなっている。次は、「児童生徒や保護者が大切にされていると感じている」の評価もBが付いている。「一部の職員に少し強い指導があるのではないか」という評価があったため、人権尊重の意識をしっかりと持っていかなければいけないと思っている。

(校長) 評価方法について少し付け加えさせていただく。この自己評価をするに当たっては、保護者からも評価をいただき、教職員からも評価を取っている。そしてそれは数字で『「できた」「ややできた」が何%』というように上がってきている結果である。しかし、その数字だけでAとかBというように決めてしまうのではなく、アンケート結果や出てきた意見を基に、まずは主たる担当課で、「こういうところは改善が必要である」、「これはこういう現状だ」という現状認識を改めてやり、皆の合意形成で出てきた評価である。今、副校長が説明したように、中身を重視した評価となっており、数字だけではない。ただし、数字も踏まえているという背景があることを御理解いただ

きたい。

(副校長) 「安全」のところでもう一つBがある。「保護者が福祉避難所指定とそのあり方について説明を受けているか」という項目である。年度当初のPTA総会で、福祉避難所の指定を受けたことについて説明をしたが、説明不足だったり捉え方に温度差があったりしたため、もう少し丁寧な説明が必要ではないかという評価でBとした。福祉避難所に関しては、新年度のPTA総会等保護者が集まる機会に説明していきたいと思っている。「安全」に関しては以上である。

「専門」ではBが2つ付いている。「つながりのある支援と指導の充実」において、「一人1台端末を活用しているか」という項目である。端末はiPadを小学部、中学部に一人1台配備している。それについて、個々の特性を生かす使い方についてはまだ研修が必要ではないかという評価があったため、B評価になっている。「児童生徒の得意を生かした授業」については、保護者には面談等で授業の様子なども伝えているが、「教員の専門性を高めなければいけない」、「もっと学んでいきましょう」という評価もあり、Bとした。

「連携」のところに1つBが付いている。概ねAではあるが、「本校の様々な交流や活動がインクルーシブの推進につながっているか」という項目について、「障がいがある人も無い人も共生の社会を目指す中で、学校が果たすべき役割について考えていくべき」という意見があり、Bとなっている。

「チーム」に関しては、「教職員のチーム力の維持向上に努めているか」という項目でBとなっている。本校は「沼特マインド」「もちつ、もたれつ」「なごやかに、おだやかに」「アサーティブ」をキーワードに1年間やってきた。「アサーティブ」とは、相手の意見は尊重しつつも、自分の意見もしっかり伝えていましょうという考え方である。しかし、職員にとってはこの捉え方が様々で、共通理解や研修が必要ではないかという評価があったためBとしている。また、教職員の時間外勤務のことについても触れているが、こちらもBとなっている。職員は日々の授業のために教材研究などに力を注いでいるが、どうしても準備に時間がかかってしまう現状がある。「放課後の運用方法を見直し、業務改善を図る必要がある」という意見があったためBとしている。

以上が職員の中での評価となっている。委員の皆さんからの御意見、質問等があればお願いしたい。

(村 本) 日々一生懸命取り組んでいる中で、できることもあるし、もう少し頑張りたいと意識しているところもあったということで、しっかりと評価をされていたと思う。委員の皆さん、何か御意見や御質問があればいかがか。

2ページ目の人権教育の部分について、ここは大変注目されるところでもあると思う。

評価がBからAになるように、皆さんから意見を伺い参考にできればよいと思うが、いかがか。学齢期や大人の障害がある方と関わりのある皆さんから、何か御意見や感想等をいただければと思う。

私の職場の話で恐縮だが、障害のある子どもたちを、昭和時代を生きてきた高齢者が支援をやっている中で、つい言ってしまうことがある。それは、今の時期はかなり不適切である。お互い愛情を持ってやっているが、なかなか改まらないなという苦労はしている。だから若い先生方、現役の先生方はいろいろなところに気を遣わないと

いけない。でもここはやはりきちんとした方が良いというところで、委員の皆さんが普段感じていることで御意見があればいただきたい。先生は愛情を持って言ってくれているんだと理解してくれる保護者は、昔々は相互理解があったが、なかなか今は難しい。どうしたら、Aになっていくのか。

(芹 澤) 今話を聞くと、数字だけではない評価でこういう結果になっているとのこと。やはり機械ではないので、一人の人間として、指導者として一生懸命やっているということが伝わってくる。なにもAへの100%を求めなくても、皆さんが一生懸命やって、それぞれの職員の方々が連携を持ってお互いに話し合っ取り組んでいくものであれば良いのではないかと。100%を求めるといことは本当に酷なことだと思う。100%のAでなくても、先生方が一生懸命話をして、指摘して、やっていることが十分伝わってきている。人と話すときは言葉を選ぶ。職員に対して自分は正しいと思っても、相手はどのように受け取るか。大人社会でもそれを日々感じている。指導とか指摘とかいじめとか、その一つの括りで捉えると仕事ができない。先生方が「こういう教育形式でやっている」といことがあれば私は十分ではないかと思っている。

(村 本) 難しいです。これでよしとせず、ちゃんと話し合われて、話題になったということで意識や気付きの一つひとつの変化を期待し、信頼していただかないといけない。

(校 長) 「変化を信頼する」。いい言葉ですね。

(村 本) 変えろと言われて変えろと、毎年話題にされてしまう。こういう機会を捉える。定期的に研修等に取り組んでいる。難しいが少しずつやっていかないと。

(山 本) 各々の考え方が違うところもあって、学校としてそれを統一するものが必要なのかどうか。先生、指導者の方の考え方もあると思うので、100点というのではないと思う。その中で皆さんができるだけ共有して、誰も自分の評価のためにやるわけではなく、生徒のためにやるということを忘れないで常に考えて頂ければよいのではないかと思う。

(村 本) 福祉避難所についてもまたBということだったが、これについては次年度に向けての改善策として「総会できちんと伝えていく」ということですので、是非実行していただければと思う。

専門のところのBについて、端末を一人1台ずつ持っていてどう使うか。難しくて分からない。

(山 本) 端末を使うことによって、いろいろな情報が入ってくると思うが、あまりにも情報過多になりすぎている。小中学校では皆が使っている。やはりどこ行っても「本当にそれが良いのか」という意見がある。「YouTubeとかそういう情報は見ない方がいいだろう」と。教材とその情報とは別かもしれないが、我々が子どもの頃は、自分の生活の範囲でしか情報は無かったので、先生に教わるという意識が強かった。今は、先生に教わる前に、いろいろな情報も入って、「本当にこれからの教育がこれ良いのか」と常々思っている。

(村 本) 一人1台端末は全国的なブームとなったが、どうなのか。また文字に戻るといこともあるか。

(山 本) 行き過ぎてはいけない。

(村 本) それも含めて、教員が専門性を高めたいという思いが、このBという評価になるのかなと思う。

(山 本) 教育で使うためには理解させるようにしないと、違う方向へ行ってしまう。子供の頃は全く無かったツールである。我々も全く分からない。使い方も分からない。これから

どう整理していくか。

(村 本) 我々委員が、端末を使って学んでいる様子を参観させてもらいたい気持ちはある。学びで使うより、遊びで使うのは天才的である。「どうやってこの画面を出しているのだろう」と感心する。「遊びで使ってもいいよ」という評価ならAになってくと思うが、先生たちは求めるものが違う。

(山 本) 「こうやれば情報が出る」ということは覚えると思う。自分で考えてみてから「どうなんだろう」「正しいのか、正しくないのか」と、最後は自分の中で判断しなければいけない部分がある。そういう力をどう付けていくか。

(村 本) 「インクルーシブ」の世界やイメージをどのように個々の教員が描いているのだろうか。「こうなればいい」という共通理解をする必要がある。すごく難しく曖昧である。「チーム」での大きな課題は「時間がない」というところだ。会議時間も限られている中で、「生きがいを感じる」という気持ちや充実感を、どうしたら先生方が持てるのかというところである。

本年度を振り返っていただいた。先生方が、厳しく自分自身を評価されている感じた。ぜひ少しでも向上と充実を目指して取り組んでいただきたい。今年度の評価についての質問応答を終わりにして、この結果で大事に進めていただきたい。

(2) 令和7年度の各学部の取り組み報告（部主事）

小学部

- ・散歩クラブで近隣公園へ外出し、地域の方との挨拶の交流が活発化
- ・店舗訪問（ダイソー、マックスバリュ、自販機）で実体験を重ね、挨拶が苦手な児童からも声が出るがあった
- ・まち探検（5年生）
前年度：看板やモニュメント観察→学校でクイズ作成
地域を知る・興味をもつ活動
今年度：マクドナルド・しまむら・郵便局・消防署などを訪問
店に行ってそこの方と関わったり何を売っているかを知ったりする活動
消防署では説明をしていただいたり、郵便局では事前準備した年賀状の受け渡し体験をさせていただいたりして関わりをもつことができた
- ・一人1台端末で見つけた事物を入力
全体発表し、達成感・自己表現を促進

中学部

- ・エコ美化委員会（中2）：缶つぶし→マム回収→東日本大震災基金化のプロセスを学ぶ
- ・年賀状学習と投函：学校近隣で投函体験→居住地でも新たな発見につながる
- ・保育施設交流（中2）：異年齢との関わりで自然な笑顔や前向きな反応を促進
- ・校外学習（中1/沼津港）：一人1台端末で事前調査→現地確認（魚介・干物・食体験）
→発表準備中（アプリを使い撮ってきた写真を入れる）

高等部

- ・クリーンサービス班：原東小学校清掃を継続、団地集会所清掃も予定
- ・高等部バザー（12/13）：来場者多数で製品も好評（陶芸茶碗・農工班大根は即売）

外部来場者はコロナ影響等で少なめ → 発信強化が課題

・ゲストティーチャー授業：

家庭科（JA ふじ伊豆）：お茶の淹れ方（高1で毎年実施）

農工班：プチヴェール栽培スペシャリスト（年2回）による指導と収穫期の実践

高3：メイク・スキンケア・ヘアセット講座（元化粧品企業の方）

地域清掃参加（11/19 沼津市クリーン作戦）：学校周辺・団地周辺の清掃を実施

（副校長） その他にも今年度の活動を一覧にした。資料を参考にしていきたい。

（村 本） 子どもたちがやってきた活動がたくさんあって素晴らしい取り組みだと感じた。

（石 原） 去年の11月に商工会が主催で、原野地区センターで「うまいものフェス」という食のフェスをやった。このイベントに向けて、静岡銀行が（お菓子の）ハニーサックルに案を持って行き、「限定のお菓子を作って売り、クリスマスに向けて頑張ろう」ということで、出店の申し込みが商工会に来た。いいことだなと思った。静岡銀行のアイデアで、特別支援学校が作っているバスケット（かご）を購入して、そのバスケットの中にマカロンを入れて販売した。完売した。そういう形で、産業と学校と金融が連携してやれた事業だということ、私も非常に心が動かされた。そういう経緯を知っている人は「連携ができてよかった」と思っている。

（校 長） 資料は、「地域にもWin、学校にもWin」というお話を聞いた中で、どういった御助力をいただいているかということ、私たちの方がどう関わらせていただいているかということ、この学校経営の「安全」「専門」「連携」「チーム」という柱でまとめたものである。先ほどの「地域でWin、学校でもWin」ということを改めて見直すには、一覧にして確認いただきたいと思ってる。こういった取組を通して、この学校の子どもたちが地域を好きになって、ここで学んだことを誇りに思うようになるというのは学校にも良いことだ。皆さんの支援の成果として生かしていただけるとありがたいと思う。

（村 本） 本協議会が始まる前に、「活動の幅が拡大していくよりも、持続可能に続けていくことが大事だ」という話をしていた。「体力的に無理だ」とならないように、継続していくことで、地域にますます理解も深まって、輪が広がっていくかなと思う。

（山 本） ぜひ、原地区の広報のシステムを使ってもらえば良いと思う。地域にもっと取組を知らせていくというか、「こういうことをやっています」と発信していただければ良いと思う。

（校 長） コミュニティ日より「ふるさと」に載せていただく原稿が、「こういうことをやりました」という報告が多いが、「今度、こんなこと予定しているから来てください」という角度の連絡が無かった。それを使わないともったいない。

（山 本） コミュニティ日より毎月発行しているのは原地区だけである。他地区は半年に1回だったり、3ヶ月に1回だったりするため、記事の内容が「終わったイベントの報告」になってしまう。しかし、原地区は「やりますよ」という発信ができる。それを1ヶ月前に掲載する。各号を一軒ずつ配って渡している。

（校 長） コミュニティ推進委員会に出席させていただいているが、おたよりの発行に関して非常に熱意を感じる。

(3) グループ協議

テーマ：「学校にとっての地域とは、地域にとっての学校とは」を考え、意見を出し合う。

キーワードから令和8年度の方向性を探る。

Aグループ

(副校長) 学校は地域にとって、地域から見てどのような存在なのかという意見を聞きたい。例えば学校は、地域にあるお祭りや伝統を子どもの頃から教育することで「引き継ぐ」といった機能があるのではないかと思っている。また、地域に学校を知ってもらうには、どんな人たちに学校に来てもらったら知ってもらえるのか。情報発信の仕方など、いろいろな思いを出していただきたい。

(石原) 私は家が戸田です。戸田から原へ来ているが、特別支援学校については何も知らなかった。名前は知っていた。どのような学校かは知らなかった。委員になって初めて分かった。普通の小学校や中学校は地域との連携が強い。しかし、障害があると少し引いてしまう。一般の人は知らない。でも実際に授業参観をして、いろいろな交流ができることが分かった。そういうことを一般の人にも知ってもらうことが必要だと思う。広報や宣伝をもっと上手にやった方が良いと思う。

(梶浦) 地域にいる人間として、特別支援学校に少し抵抗のある人たちがいる。特別支援学校はスキルを身に付ける、生きる力を持てるように成長させてくれる場所というイメージがある。障害がある子たちが生きていくために必要な力を教育してくれる場所というイメージが私たちにはある。だから、私たちも発信しなければいけないと思う。周りの目を変えていくような、何かをやらなければいけないなと感じている。特別支援学校がもっとあるといいなと思う。

(校長) 自慢ではないが、この学校に来て排せつ面が自立して特別支援学級に戻っていく子どもがいる。

(梶浦) すごいなと思っている。親の望みは「もっと勉強もしてほしいけど、将来的には頑張って生きていって」という、そういう力をつけてほしい。そういう力をつけてくれる場所だというイメージがすごく強い。

(副校長) 見学していただくのも、放デイだったり関係者だったりするが、もう少し広げるとしたらどのあたりがターゲットになるか。

(梶浦) 普通の小中学校の保護者だと思う。広くすると大変なので、近くの学校のPTAに来てもらえるといいかもしれない。

(副校長) 例えば、隣の原東小学校のPTAはどうか？

(村本) 文化祭とか何かで来てもらうとよいのでは。高等部の生徒がいろいろ仕事ができるという姿を、企業の方に理解してもらうとか。

(石原) 質問したい。私は普通の小学校の学校運営協議会の委員もやっている。驚いたのは、授業中に教室を出て「休息教室」に行く。特別支援学校では、気持ちが不安定になってしまったときはどうするのか。

(中主事) リラックスルームみたいな場所がある。少し気持ちを落ち着かせる場所を決めて、気持ちが落ち着いたらまた授業に戻る。授業中に気持ちがいっぱいになってしまうと、本人もそこで集中できなくなってしまって、何が何だか分からない状態になってしまうので、一旦その場を離れて落ち着く場所がある。

(池谷) 気分が悪くなるという時もあるか。

(中学部) ちょっとクッションを置いてみたり、ちょっと部屋を暗くしてみたりとか。そういう

ことで気分が変わったりする子もいる。

(石 原) 何人かいる。

(池 谷) 普通の小学校でもいる。

(副校長) そういう現状は、我々も知らなければいけないのかなと思う。互いの学校のやり方を知っておかなければいけないのかなとも思う。

(校 長) 私は小学校に勤めたことがあるが、恐らくその時は、職員が状況を見ていて、彼ら彼女らにどうアプローチするかという個別会議はやっていると思う。

(石 原) ルールがあるが、「あれしてこれして」など一切言わない。見守っているだけ。

(池 谷) さっきの学校評価の話になるが、Bとなっていたところは共通理解があまりできていないところにBが多かったと思う。人権の評価で「言葉が強い、きつい」というところがあった。「奇跡の人」でヘレンケラーのサリバン先生との関係を思い浮かべる。サリバン先生はヘレンケラーに強い言葉でアプローチしている。あの当時はそれで許されていた時代だったが、今はそんなことしたら大ごとになってしまう。ただ、そういった指導の結果で「ウォーター」って言った。その「結果」をどのように評価するのか。教育の本質的な部分をグループワーク等で話し合っていくことで、前へ進んでいくような気がした。

(副校長) 人対人だからどのような結果になるかは分からないが、結果をどう捉えるかということの難しさだったり、やり取りの難しさだったりする。学校にとって地域は、子どもたちが活躍の場だと思っていて、高等部のクリーンサービス班が外へ出ていくことで地域に貢献できるし、それで評価をもらって自信になってという、繰り返したと思う。

(石 原) 外へ出た方がいい。もっと外に出ることによって、地域の人に知ってもらおう。垣根作らずに学校の外に出て行った方がいい。

(副校長) 清水町は「柿田川」というイメージがあるが、自然とか水とか環境とかの教育を清水町は盛んにやっているのか。

(梶 浦) やっている。柿田川に「開放教室」というものがあったり、「教材園」というものがあったりして、水遊びをしながら生体の確認をしたり、水の透明度を調べたりする学習をやっている。

(副校長) 「地域」というと学校がある周辺というイメージがあるが、沼津特支の学区である清水町や長泉町でも学習の場があるといいなと考えている。

(池 谷) 地域別の活動があるといいなと思った。

(中主事) 高等部は、去年は長泉町や清水町まで出かけて調べ学習をしていた。

(梶 浦) スクールバスのバス停が柿田川公園になっている。

(池 谷) そういう単位で集合して、そこで勉強をやるのもいい。

(副校長) 地域にある自然や特徴的なものを学習の材料にできると良い。

(池 谷) 学校にとって、地域は社会資源である。その観点から、学校には無い社会資源をフル活用できることはとても大事だ。

(梶 浦) 柿田川の保全で、年に2～3回程度で柿田川公園の清掃をやっている。あちこちの学校からボランティアで参加してもらって、地域の人たちが大集合する。(草の) 外来種の駆除があり、水に入れる人は水に入るし、地上で外来種を抜く係もいてみんなでやる。外来種の草は繁殖力が強い。いろいろな地域の中学生や高校生が来てくれて、みんなで一斉に柿田川の掃除をするという日がある。

(副校長) それは休日にやるのか？

- (梶 浦) 日曜の朝早くからやる。
- (池 谷) 参加できるといい。源平川の清掃活動も地域の人たちがやっている。地域の資源を大事にしようという取り組みを学校でやっても良い。学校だけではなく、地域での学び。
- (副校長) 沼津は「おんべこんべ」という竹を持って練り歩く伝統行事がある。
- (教 務) 竹を担いで、掛け声があつてすごいなと思った。
- (池 谷) どんな由来があるのか？
- (副校長) 「おんべこんべ」は大塚新田の伝統的な正月の行事だと聞いている。おんべという太い竹とこんべという細い竹を担いで掛け声をかけながら地域を練り歩く。無病息災、健康安全を祈願する正月の行事だと聞く。子どもたちもやっている。
- (梶 浦) 地域によっては祭りとか運動会の参加者が少なくなった。人がいない。なので、地域の行事が開催できないくらい、子どもたちの参加率も少ない。また、お神輿も担ぎ手がいないので、車で運ぶこともある。風流がない。お神輿はトラック、お賽銭箱だけ子どもが持つ。子どもも四人くらいしか集まらないので、子どもが頑張ってくれないと地域の活気がなくなる。引き継がれていかなくなっている。
- (池 谷) 子ども会の活動もなくなってきている。お神輿を担がない。祭りもやらない。
- (副校長) 子ども会もPTA活動もだんだんなくなっていく。
- (梶 浦) 子どもの時に経験してないから引き継いでいかない。なくなってしまう。
- (池 谷) 明治時代に比べると人口は増えて、今は一億二千万人である。人口は増えているから、絶対数が減っているわけではない。関わりやつながりがないというところだ。つなげていくためにはどうしたらいいのかというところは、やっぱり経験とか体験だ。学校が音頭取ってみようみたいな。ハロウィンやクリスマスではなくて、伝統的こういうのももっと盛り上げた方がいいのではないかと思う。伝統行事を、学校で音頭取ってやると良いのになと思った。その人たちに講師で来てもらえばいい。
- (村 本) 地域の伝統行事をやるのも素敵だと思う。
- (副校長) 清水町も伝統的な祭りがあるか。
- (梶 浦) 祭りはやっている。湧水公園で高校生が楽器演奏をしてくれたり、発表の場として空手クラブも来たりする。農業祭もあるので、太鼓を叩いたり、白菜を売ったりして結構みんな楽しみにしてる地域の祭りの的なものがある。
- (石 原) 学校の教職員は「働き方改革」と言われているが、具体的に何をやっているのか。
- (副校長) 業務改善や行事の精選である。
- (池 谷) 学校はタイムレコーダーがあるか。
- (副校長) ない。
- (池 谷) 職場にタイムレコーダーを入れる話がある。学校もそうになってしまうのか。役場はどうか。
- (梶 浦) 役場はパソコン上で自分で押すタイプである。

Bグループ

- (小主事) 地域はお店や公園など、学校では用意できない実際の学びの場である。
- (芹 澤) インクルーシブを考えると目に見えるつながりが生まれる。自然に受け入れられるような環境が生まれれば良いと思う。
- (教 頭) 土日に草取りをしていただいて、けっこうな量の袋が玄関の前に積んである。「やっておいたよ」という気持ちがありがたい。

学校ができることはないかな

- (山 本) 安全面で言ったら仕方ないが、校門が閉まっているのは閉鎖的に見える。
- (小主事) 隣の学校との交流は6年間である。
- (芹 澤) どのように接すればよいか分からない。最初は交流するのに時間がかかる。繰り返すことで心が通う。
- (立 川) 一般の人たちは触れてはいけないものとして捉えているから、こちら側から交流しようというオープンな認識で行かなければ。触れ合うまでのハードルが高すぎて、相手が高く設定してしまう。どこまでやってよいか分からない。大人が高くしてしまっている。
- (山 本) 今の子どもは遊ぶと言っても各々でゲームをやっている。やっていることは別々で、その場にいるだけで安心している。
- (立 川) 一堂に会して交流の場を作る。ライオンズクラブで2回目の運動会をやった。初めて参加した野球部の子どもたちは関わり方が分からず待っている。待っていても始まらないので接し方を教えてあげる。それだけで子どもたち同士で普通に楽しんでいる。大人がブロックしている。大人がオープンにならないと。COCOO（コクー）でイベント情報を流すようにしてくれているため、保護者も行ってみようかなと思う。前より情報が入ってきているので、学校以外の外部でやっていることを発信して保護者が外に出ていく。
- (山 本) 親として外に出ていく意識はどうか。
- (立 川) 経験上では、参加しない。警戒している。なぜなら、どういう状況か分からないから誰かが行くと「楽しそう」となる。数をこなす必要がある。先日、PTA 会長同士のグループラインを作った。周囲の学校のPTA とのつながり。
- (芹 澤) 「責任」となると進んでいかない。
- (小主事) 原東小とはなかよしタイムをやっている。誰でもできるゲームや高学年になると自分たちで考えるゲームをやる。それとは別に年に2回程度、居住地の学校でも授業に参加している。
- (芹 澤) 保護者に余裕がなさすぎる。学校にすべてを頼っている。少しでも保護者の気持ちをほぐすことができれば地域に溶け込んでいく。長い目で見ることが必要がある。働く親も多い。子供を安心して預けられる場所があると親も余裕ができるのに、個々が悩んでいる。親同士がつながるとよい。
- (山 本) タブレットも使い方である。本を開くことも大事だ。目的の物しか見ない。答えが出てしまう。書くことも少ない。
- (小主事) 子どもの宿題に書き取りがない。予定帳もないから親が分からない。管理する側は楽である。

(4)令和8年度 学校経営計画（案）について

- (校 長) 皆様本当にグループ協議の方をありがとうございました。学校経営計画についての最後のまとめの話を少しさせていただく。いつも学校運営協議会では、その下で何か一つ打ち出して、それを即実行して成果を出さなければいけないのではないかという思いに囚われることがあった。このようにじっくりと地域について意見を出し合ってくださいたり、沼津特支について、思っていることや感じていることを出していたり、それを交流させるということそのものが本当に大事だなということを思いながら拝見していた。

学校経営の話に戻るが、学校評価のアンケートの数字をそのままではなく、そこか

らどう現状認識するかということをもみんなで協議していく過程を本校では大事にさせてもらっている。来年度の学校経営計画についても、私からの一方的な話に聞こえてしまうこともあったかもしれないが、経営計画が決まってしまうまでの過程を大事に話をさせていただいている。

本校の職員会議で来年度案が出てくるまでの過程を、共有した資料が2つあるので、資料を用意させていただいた。1つ目は、ステージと月ごとの人権目標と沼特マインドがあるが、毎月、沼特マインドの中から重点を置き、事あるごとに会議のタイトルに入れて、「今月はこれだったよね」ということを思い出してもらうような工夫をしている。来年度に向けての学校経営計画を立てる際に、まずは職員には報道等にある教職員の処遇改善、給特法などを共有するところから始めた。一方で、そういう処遇等が改善されてくると、職場環境についても一人ひとりの責任が発生して、職場環境を改善していかなければならないという状況が生じる。

そして2つ目に県教育委員会の大きな動きとして、いろいろな事務処理をシステム化していった、それを教員が責任の下、自分のことは自分でやっていくということが非常に強まってくるため、それも逐次説明している。

3つ目は令和8年度の学校経営計画である。これまでの経緯の中で、私が赴任した令和4年度からの学校経営の変遷、重点の押さえを改めて行い、運営委員会という会議で、職員にアンケートで「本校の使命」というものを問うてみた。そこから出てきた意見をまとめると、「安心・信頼を基盤として、高い専門性を生かし、子どもたちの自立と社会参加を最大限に図り、社会全体への理解促進と共生社会の実現に向けて貢献していく学校」となった。いいこと考えてくれてるなと感じた。こういった方向性が出てきて、やはり本校の使命というものが来年度のキーワードになると考える。その使命を、表面的なインクルーシブの推進だけではなく、沼津特支が児童生徒にもたらしたいことは何か？保護者にもたらしたいことは何か？地域や関係機関にもたらしたいことは何か？学区にもたらしたいことは何か？で、そのもたらす使命を果たすことで、どんなことが期待できるのか、その実現のためにどんな職場環境を用意すべきか、ということアンケート結果から整理をかけた。職員が思っていることから来年度の軸を定めていきたい。方向性を定めるだけではなく、そのために取り組みたいこと、どんなことができるかということ、全職員にアンケートを取った。その結果は資料にあるとおり。

さらにそれだけではなく、「安全」ということに関して、「不適切な指導に気付いていない職員がいる」という生の意見が出ている。昭和の関わりとか、目的を達成させるための強い指導とか、時間に追われ良かれと思ってやってしまうことが多い。それに関して、例えばアサーションは、「あなたもOK、私もOK、違いは間違いではない」という理念に基づいているから、解釈の仕方によっては他人にはとやかく言えないとか、全部いいでしょ、全部肯定しなきゃいけないでしょっていうところに行ってしまうがちであった。そこを一步進めて、必要なことをちゃんと伝え合う、相手に失礼のない言い方を身に付けることがアサーションなのだという話をする。また、そういったところを自己の振り返りや周囲の声から省察することで、一人ひとりの尊厳を大事にする関わりが持てるようにする。

個別指導計画を生成AIを活用して作っていくという県の動きがあるので、それをどれだけ子どもに合わせてやっていくかという話も出てきている。

さらに、結構時間をかけて話したのは、ワークライフバランスの部分である。先ほど給特法の話も出たのですが、ワークとライフのバランスがますます個人の責任に下りてくる。先程のグループワークの中でも「時間がない」や「余裕がない」などの意見があったように、それがきっかけでつながりが薄れてくるということがある。ワークとライフのバランスについては、ライフを充実させなければいけないということを考えがちである。職場の立場としてはワーク（専門性）を高めるということが大事である。専門性を向上させ、自分自身を理解するという事。それには、「自分の立ち位置や、自分はこういう専門性が必要だから、自分はこういう勉強がしたいと思う」という考えから、自己理解に基づいたワークとライフのバランスと、一人ひとりの持ち味とか強みというものが出てくると思われる。そこをチームの中で生かし合ってやっていく。一方で一部の教員に負担が集中しているのではないかと、育児中の職員が肩が狭い思いで働いているのではないかと、いろいろなことが出てきてしまう。定期的に感謝の機会を設けたり、そういうことの中でお互いの持ち味や今頑張れていることを明らかにしたりすること。例えば育児に勤しんでいて、遅く来て、早く帰る職員にしてみても、その育児の期間が終わればまた別の働き方ができるわけですし、今バリバリにやっている人もだんだん歳を重ねていって、体の動きや家での介護とかになってくると100%やれなくなってきたりする。だから、職員の働き振りや評価を今のことだけで決めつけしないで、チームみんなでどうにかしていこうという気持ちを持ちながらやっていけるような方向性で次年度の案を考えている。

来年度の案は、今年度のB評価を反映したところに重点を置いた学校経営計画である。例えば人権のところは、取組手段として「徹底」と書いてある。徹底させることで成果目標を達成させたい。「連携」のところでは、児童生徒が地域でよりよく生きていくための共生共育の推進、子どもたちがよりよく生きていける、子どもたち自身も地域に受け止めてもらおう、受け止めてもらえる振る舞いができるように育てる、地域の方々にも理解をいただく、それが「豊かに生きる」ということ。それから、勤務の19時15分退勤の実施、90%の順守とあるが、これは県から数字を入れるよう通知が出たため、職員にも説明をした上で、心の健康や余裕につながることを合意形成していきたい。アサーションに関して、表面的な理解ではなく、子どもたちのために必要なことを伝え合っていけるようにしていきたい。以上が次年度の案である。さらに整えたものは来年度の学校運営協議会の場で皆さんに御承認いただき、経営を進めていく形になっている。

(村 本) 大変分かりやすく、説明いただいた。また来年度も、深めて、改善、進歩という形で進めていってほしいと思う。

4 閉会